

西と東 北と南

加藤淳平

(一)

西暦一九四五年の、日本の敗戦より始まれる第二次世界大戦後の世界には、西と東の基本的対立ありき。

一方に於て、大西洋とヨーロッパ中心に見たる「西」側の、米國と西ヨーロッパなる、自由主義と民主主義政治の、所謂「自由陣營」、他方に於て「東」側なる、ロシアと中國等の、共產主義イデオロギーと専制政治の、自稱「社會主義陣營」、此の二つの陣營の對立なりき。

當時のヨーロッパを中心とせる、歐米世界の人々、世界情勢を、「西」側「自由陣營」と、「東」側「社會主義陣營」の、戦力行使には至らざれど、一歩手前の對立なりと見て、「冷たき戦争」、即ち「冷戦」と呼び慣はし、第二次世界大戦終結の西暦一九四五年より、冷戦の「東」側なる「社會主義陣營」の、崩壊せる西暦一九九一年に至る半世紀弱を、「東西冷戦時代」と呼べり。

當時の我ら日本人、亦、歐米世界の人々に倣ひ、東西對立の圖式に則りて、世界を見るが常識なりき。但し我ら日本人に、不都合無きに非ず。そは、我らより世界を見て、西側に位置せる、ロシアと中國等の陣營を「東」側陣營、或いは「東」側諸國、東側に位置せる米國、及び北太平洋諸國を「西」側陣營、或いは「西」側諸國、と呼びたることなり。されど當時の日本人の多くは、斯かる不都合の存在に、感づくことだに、ほぼ無かりしに非ずや。感づくことほば無きままに、我らが日本の西側の、中國等の國々を「東」側諸國、米國等東側の國々を「西」側諸國と呼ぶこそ、第二次世界大戦後の世界の常識なれと信じ、西側の國々を「東」、東側の國々を「西」と呼ぶに、格別の違和感無かりしに非ずや。

斯く第二次世界大戦後の我ら日本人の、世界の人ら、と云ふも實は、歐米人のことに過ぎざりしも、その歐米人が眼を藉り、而もそをほぼ意識せざるままに、我らが西の國々を「東側諸國」、東の國々を「西」側諸國と呼びたり。

斯く、東は東、西は西なる當然の呼稱に違ひたる、我らが世界の見方に、些かの歪みを與へざりしか。

(令和四年十月二日受附)